



松村理司(監), 酒見英太(編)

『診断力強化トレーニング 2 What's your diagnosis?』

〔評者〕 東光会七条診療所所長 小泉俊三

本書は、書名が示すように2008年に刊行された『診断力強化トレーニング』の続編である。今回は監修の立場に移られた松村理司先生(洛和会総長)が、巻頭の「序」で本書の礎となっている「京都GIMカンファレンス」が1998年以来、休むことなく開催され、昨年2月には200回を数えたことを紹介しておられる。評者も、5年近く毎月第一金曜日は「京都GIMの日」と決めて参加しているが、京都・山科にある洛和会音羽病院の会議室を埋め尽くす熱気には、毎回圧倒される。

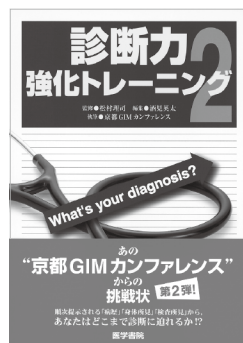
本書をひもといてみると、前書を踏襲して50症例が「救急外来」「一般外来」「紹介受診」に色分けされ、その合間に要点を短くまとめた「Bullet」症例が38例掲載されている。

ご存知の方もおられると思うが、京都GIMカンファレンスのちょっとした楽しみは各症例の「表題」である。時に羽目を外すこともある意味不明のタイトルは、言葉遊びといっても多くの場合は語呂合わせ(ダジャレ)の類であるが、症例提示と謎解きを試みる“真剣勝負”が終わったところで紹介される“タネ明かし”の一瞬が何ものにも代えがたい(心地よい脱力、と言えようか)。一堂に会した同好の士として、場の空気を共有できる一瞬でもある。

20年近く綿々と続いてきた白熱討論の記録集としての本書の迫力は、どのページからも直ちに伝わってくるが、実際に本書を参考書や教科書、教材として活用するには一工夫も二工夫も要るように思える。巻末に症例の「診断名一覧」が示されているので、たとえば稀な疾患の概要を復習したい読者は、すぐに読みたいページに移ることが可能である。

しかし、本書の値打ちを最大限に引き出す利用法は、自分でペースを決め、じっくり時間をかけて読み進めることであろう。はやく正解を知りたい衝動を抑えて、自分なりの思考(診断推論)を反芻しながら、筆者と対話する気持ちで読み進むことによって、疾患の生きたイメージを頭の中に組み立てることができる。言い換えると、プレゼンターとの対話を通じ、また同様の対話を多くの症例で繰り返すことで、私たちの記憶装置の中に“類似”の症例が重層的に蓄積される。こうして、無味乾燥な情報の塊でしかなかった疾患概念に肉づけがされて典型的な“病像”として定着し、機に応じて参照可能となるのである。

もうひとつの利用法として、研修医ら勉強仲間



「京都GIMカンファレンス」
白熱討論の迫力

で役割を決め、カンファレンスを再現するつもりで読み進むことも考えられる。担当者だけがしっかり予習をしてプレゼンターの役割をし、上級医が討論の進行を引き受ける、などの方法である。模擬体験的学習を通じて、症例についての理解だけでなく、その問題点をまとめ、相手に伝える力も身につくと思われる。

そこまでくると、次は「京都GIMカンファレンス」そのものに飛び入り参加することをお勧めせざるをえない。評者は近隣の研修病院のカンファレンスに参加する機会が少なくないが、何とか時間を捻出してあるいは上司の許可を得て京都GIMカンファレンスに参加するよう、研修医たちに強く勧めている。文字どおり、「百聞は一見に如かず」である。少々遠方の方も、一度は足を運んでいただきたいと思う。

付け加えると、本書は結果として稀な疾患の集大成(稀な疾患の典型例、よくある疾患の稀な症候、さらには稀な疾患の稀な症候)となっているので、やむをえず数多くの特殊検査が行われている。救急外来では、時に迅速に検査を行う機敏さが必要であるが、「一般外来における診断の心得」(p.52)にあるように、読者には「まず病歴だけで診断に迫ってやろうとの気概を持って」診療に当たり、検査も「仮説を効率よく支持・否定するものに絞る」ことを心がけ、臨床推論を無視した過剰検査に陥ることのないよう、賢明な選択(choosing wisely)を心がけていただきたいと考えている。

● B5 / 頁 256 / 2015 年 / 定価: 本体 3,800 円 + 税
[ISBN978-4-260-02169-2] 医学書院刊